
ポケットモンスター ジョウトに転生!?

ナンテコッタイ!!! <(^o^)>

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター ジョウトに転生！？

【Nコード】

N2786Z

【作者名】

ナンテコツタイ!!!<(^o^)>

【あらすじ】

神のミスで死んでしまったポケモン好きの高校生タクヤは、ジョウトに転生することになった。使用するポケモンは生前ゲームで使っていたポケモンで、家にはポケモンの転送装置まである。タクヤはジムを回ってリーグに出場しようしようと考えてる。

Prologue 転生前

「ん？ここはどこだ……？」

俺はタクヤ。ポケモンが好きな高校生だ。今俺は、真っ白な空間にいる。

タ「はあ、何にもねえな……。つて、誰アンタ！？」

そりゃ驚くよ、いきなり空から人が降ってきたんだから。

「私は神だ」

タ「ダメだ、ただの痛い人だ」

痛神「誰が痛い人だ！！つて、のところまで痛神ってされてるし！！だから、私は神だつて言っているだろうが」

タ「で、神（笑）が一体何のようですか？」

神「お前今、神の後に（笑）付けただろ。まあいい。お前には転生してもらおう」

俺は耳を疑った。は？俺死んだの？

神「そう。お前は私のミスで死んだのだ」フンス

タ「ちつたア悪びれるよ……」

神「だからせめてもの詫びとして、ポケモンの世界に転生してもらうことになった」

タ「あ、ああ。で、向こうに付いた時の手持ちは？地方は？」

神「お前、生前にポケモンしてただろ。手持ちとかのポケモンは生前にゲームで使っていたポケモンを使ってもらう。ボックスの代わりとして、転生後のお前の家になるところにでも転送装置を置いて

おこう。あと、ジヨウト地方だ」
タ「ありがとうございます」

実際に会えるのか、俺のポケモンたちに……

神「さて、ここでひとつだけ願いを叶えてやろう。何がいい？」
タ「うーん……俺が願えばそのポケモンは個体値が6Vになるとか？」

神「いいだろう。では、良い転生ライフを。お前のバツクの中に細かいことを書いた紙を入れておく」

タ「はい、ありがとうございます。って、うお！？」

床に穴があいた。うわあ~~~~落ちる~~~~!!!

タ「どうしてこうなった~~~~~!？」

Episode 1 目覚めると29番道路

タ「ん、んん？」

俺は目を覚ました。あのクソ神後で殺しちやる。で、ここはどこだ……？

タ「とりあえずバッグとかの確認をするか。っと、手持ちはっと」

腰にはボールホルスターがついていて、6個のモンスターボールがあった。

タ「えっと、こいつが色違いのテッカニンで、こいつがガブリアスか。これはハッサムで、これがゲンガーで、これはカイリキーで、最後にマルマインか……」

これはすべて俺が生前使っていたポケモンだ。特にお気に入りなテッカニン。ポケットに入れて色違いの陽気なツチニンを育てた。

タ「次はっと、これはポケギアで、こっちがトレーナーカードか……。どれどれ」

ポケギアのマップを確認すると、ここは29番道路というのが分かった。トレーナーカードを見ると、名前はタクヤで、6年前にトレーナーになったことになっている。しかしバッグは一個もなし。誰かと旅したいから言い訳を考えとかないといけない。

タ「で、これが図鑑で、バッグはこれか」

まず、図鑑の動作確認としてテッカニンを調べてみた。

テッカニン 忍ポケモン。ツチニンの進化系。鳴き声を聴き続けると、頭痛が収まらなくなる。見えないほどの速さで動く。

と、説明が流れた。

使える技は、虫食い、ひっかく、固くなる、吸血、すなかけ、乱れひっつき、心の眼、影分身、連続切り、嫌な音、剣の舞、切り裂く、高速移動、バトンタッチ、シザークロス

ちよいちよい、いつまで続くんだよ、オイ。

エアカッター、スピードスター、さわぐ、糸を吐く。

結局、テッカニンが覚える技の全てを覚えていた。

タ「オイオイ、覚えられる技が4つより多くても大丈夫だとしても、覚えられる技全部覚えているとは……」

次にバッグを探ると、いろいろな回復道具やドーピング用品の他に紙が一枚入っていた。

タ「なんだこの紙？何か書いてあるな、なにになに？」

タクヤへ

お前の家はポケギアのマップで確認しておけ。

今の手持ちはそれだが、そのほかのポケモンはお前の家で放し飼

いにされている。

お前の家になるところには、一人使用人を置いておいた。お前のいない間の家とポケモンの管理はその人に任せておけ。

では、良いトレーナーライフを。

神より

タ「神からの手紙か……。ま、とりあえずマップ確認しながら家に行くか」

とりあえずワカバタウンを目指すタクヤであった……

To Be Continued...

Episode 2 ワカバタウンと俺のポケモンたち

タ「っと、俺の家になるのはここか……」

どーも、タクヤです。つい先ほど転生してきた者です。

俺は今、ポケギアを確認しながら自宅に向かっているところです。
今、自宅を見つけました。

タ「まあ、入ってみるか……」

とりあえず門を開け、入ってみた。

？「おかえりなさいませ、タクヤ様」

タ「うおっ!!」

玄関のドアを開けると、そこにはメイドが迎えていた。そのメイドは、金髪ロングな髪型で、スタイルもかなりいい。かなり美人だ。

タ「ああ、アンタが例の神様が用意した使用人？」

メ「はい。神様から手紙を預かっています。こちらを」

タ「おお、サンキュー」

メイドからもらった、神様からの手紙を読んでみた。そこにはこんな内容が書かれていた。

タクヤへ

自宅についたらメイドが迎えていただろう？その娘がお前のメイドだ。

家の管理、お前の身の回りの世話は基本その娘がする。お前が

いない間のポケモンの世話や、ポケモンの転送などもしてくれるぞ。では本題だ。その娘には基本何してもいいぞ。むしろ何もしない方が損というものだろう。抱いても咎めないし、ほかの娘に変えて欲しいのなら変えてやる。さしずめ性欲 理役として使ってもいいということだ。

では良い性 生活をな……
神より

タ「ブツ！……！」

俺は吹き出してしまった。

メ「どうされました？」

タ「あ、アンタはこの手紙の内容知ってるのか？」

メ「ああ、 欲処理のことですか？」

タ「ブツ！……！そ、そうだよ。アンタはこれでいいのか？」

メ「タクヤ様のご命令とあらば」

タ「そ、そうか……」

メ「もしかして、今から抱きたいと仰りますか？」

タ「ち、違う違う！ちょっと確認しただけだ」

メ「そうですか。では、家の中を案内しましょう」

そう言われて、いろいろな部屋を見ていった。広すぎると思えるほどのリビングや、普通の家のリビングほどの広さもある俺の部屋。使用人の部屋などを見て回った。そして……

メ「こちらから、ポケモンが放し飼いにされている庭に出ることができます。セキュリティは万全で、おそらくロケット団如きが入ることはできないでしょう……」

タ「そうか……。おっ、アイツはカイリユーカーか。こっちはジュカ

インもいるな……。湖の方にはギャラドスやスターミーもいるな……。また手持ち変更の時は頼むわ」

メ「その説明ですが、まずは家の中に入りましょう」

俺たちは家の中に入り、リビングに来た。

メ「このパソコンが、転送装置です」

タ「へえ……」

そこにはさほど大きくはないが、そこまで小さいわけでもないデスクトップパソコンと、その横にUSBケーブルでつながれた、半球状のくぼみの付いた小さな機械があった。

メイドは半球状のくぼみの付いた機械を手にして言う。

メ「まず、放し飼いにされているポケモンをボールに戻し、この機械にセットします」

そう言うと、次に小さめのノートパソコンと、同じ半球状のくぼみの付いた小さな機械を取り出した。

メ「次に、同じくそちらでもボールをセットして、最後にパソコンでこのように操作すると転送されるのです」

タ「ちよつと待て、パソコンのバッテリーは？」

メ「それは神様の力を使って、永久電池にしてあるので大丈夫です。では、こちらのパソコンと転送装置を渡しておきます」

タ「それはそれでどうかと思うんだが……。ま、いいか。俺はとりあえず疲れたから寝るわ」

メ「私と一緒に？」

タ「『疲れたから』と言ったのが聞こえなかったか？お前と一緒に寝たら理性が持ちそうにないんだが……」

メ「冗談です。いつごろ起こせばいいでしょうか？」

このメイド、意外と茶目っ気があるようだ。それにしてもいつごろ起こしてもらおうかな……

タ「じゃあ、飯ができたらでいいよ。旅立つのは明日にする。ウツギ博士の研究所にも行きたいしな」

メ「了解しました。ではおやすみなさい」

タ「おう、おやすみ」

とりあえず俺は、自室に来了。

ベッドに寝転がり、さっきまでのことを振り返る。

タ「ふう、何かいろいろありすぎだな。美人のメイドさんといい、性欲処 役といい、精神的に疲れたよ……。ま、明日は旅立ちか……」

俺は目を閉じる。するとすぐに意識は眠りに落ちていった。

T O B e C o n t i n u e d . . .

Episode 3 ウツギ研究所と新人トレーナー

タ「はあ。昨日はいろいろありすぎて疲れた……」

ども、タクヤっす。昨日は散々でした。メイドに起こされて飯を食いに行ったら、メイドに「あーん」されそうになったし、風呂には突入してくるし……

タ「ま、今日から旅立ちだしな！強気で行くぜ」

そう。今日は旅立ちなのだ。

タ「そういえばジョウトではポケモンを一匹出しておくのが流行っているんだっけ？よし、出てこいハッサム」

ハ「ハッサム！……！」

タ「ハッサム、今日は旅立ちだから強気で行くぞ。今日からよろしくな」

ハ「サム、ハッサム！……！」

メ「おや？タクヤ様、もう行かれますか？」

タ「ああ。家のことは頼んだぞ？行くぞハッサム！」

ハ「ハッサム！……！」

メ「行ってらっしゃいませ、タクヤ様、ハッサム」

いよいよ旅立ちだ。新人トレーナーがいたら一緒に旅しようかな。いつそ鍛えてやるのか……

そんなことを考えているうちに、ウツギ研究所についた。そういうウツギ博士って研究中は周りのことが見えなくなるんじゃないかな。たっけ。

タ「ごめんくださいーい！」

ハ「ハッサム、ハッサム！」

「はい？どちら様？」

タ「どうも、トレーナーのタクヤです。こっちはハッサム」

ハ「ハッサム！」

タ「こちらの研究者さんですか？」

研「そうだよ。博士に用事？」

タ「まあ、トレーナーとして会って会っておきたいので」

研「そうか。じゃあ入って」

タ「失礼します」

研究所に入った俺たち。そこには新人用のポケモンである、チコリータ、ワニノコ、ヒノアラシと、それを見ているウツギ博士がいた。

タ「ウツギ博士」

ウ「ん？誰だい君は？」

タ「トレーナーのタクヤです。昨日ワカバタウンに引っ越してきたんです」

そう。俺の出身は一応カントーのタمامシシティになっている。昨日引っ越してきたことになっているのだ。

ウ「そうか、君が引っ越してきたのか……。そのハッサムは君のかい？」

タ「そうです。ほらハッサム、挨拶しろ」

ハ「サムサム、ハッサム！」

ウ「ははは、元気がいいね。で今日はどっいった用事かい？」

タ「まあ、引越しの挨拶と、トレーナーとしてウツギ博士に会っておきたかったです。まあ、今日旅立ちの新人はいないかな？」

か考えてたりしますけど」

ウ「新人かい？それなら二人居るよ。一人はブリーダーを目指してるとか」

タ「マジすか？名前はなんですか？」

ウ「確か、コトネちゃんとカズナリ君だったかな」

マジか？あのシンオウに来てサトシたちと会ったアイツらか。

タ「俺も会ってみたいです。いいスか？」

ウ「もちろんだよ。先輩として色々と教えてあげて欲しいし。そういえば君はジムを回ってるのかい？」

タ「俺は元々研究職に就きたかったからトレーナーになっただけですからジムは回ってないんです。でも最近実力を試したくなっただけ」

ウ「そうか。応援してるよ」

タ「はい。ありがとうございます」

そんな話をしてる間にハッサムはチコリータたちと遊んでいた。

ハ「サム、ハッサムハッサム、サム」

チ「チコ！」

ワ「ワニワニワニ！」

ヒ「ヒノー！」

ハ「サム」

仲良くなってるし……

ウ「図鑑は持っているかい？」

タ「自作のならこれを」

図鑑は自作ということにしてある。

ウ「自作！？君はすごいね!!！」
タ「いえいえ」

そんなことをしていると、新人トレーナーが来たようだ。

コ「こんにちは〜！」

マ「リルル〜」

カ「待つてよコトネ〜」

コ「カズナリ遅い！」

ウ「こんにちは、コトネちゃん、カズナリ君」

タ「こんにちは」

コ「こんにちは〜。この人は？」

タ「ああ、俺はタクヤ。昨日引越してきたトレーナーだよ」

カ「はあはあ。こんにちは、ウツギ博士。こちらの人は？」

ウ「昨日引越してきたタクヤ君だよ」

タ「で、そのチコリータたちと遊んでいるのが俺のポケモンのハツサムだ。ほらハツサム、挨拶だ」

ハ「ハツサム！サムサム、ハツサムー！」

コ「私はコトネで、こっちがマリル。よろしくって事ね、ハツサム
マ「リルル〜」

カ「僕はカズナリです。よろしくお願いします」

はあ、アニメに出てきたコトネとカズナリそのものだ。

ウ「じゃあ、新人トレーナー用のポケモンをあげるから、この三匹から選んでね」

タ「みんな頼りになるぞ」

コ「うーん、どの子にしようかな……」

カ「そうですね〜……」

かれこれ10分。悩んだ末に……

コ「じゃあ、私はチコリータにします。チコリータ、よろしくって事ね」

カ「じゃあ、僕はワニノコにします」

チ「チッコー!!!」

ワ「ワニワニ!!!」

ヒ「ヒノ〜……」

ハ「ハツサム、サム」

選ばれたチコリータとワニノコはとても喜んでいて、選ばれなくて落ち込んだヒノアラシをハツサムが慰めていた。

タ「そうだ。君たちの旅に俺もついてっていいか？」

カ「タクヤさんが？」

コ「勿論、いいて事ね」

チ「チッコー!!!」

ワ「ワニー!!!」

ハ「サムサムー!!!」

タ「サンキュー。ハツサムもこいつらと仲がいいみたいだし、喜んでるよ」

ということ、俺たちは旅立つ

ウ「ちょっと待ってくれるかい？」

タ「何ですか？ウツギ博士」

ウ「タクヤ君にヒノアラシを貰って欲しいんだ」

タ「いいんですか？」

ウ「君のハッサムと仲良くなったみたいだし、引き離すのもかわいそうだからね。君だったら悪いようにはしないだろうし」
タ「ありがとうございます」

俺はバッグからパソコンと転送装置を出した。

ウ「何だいそれは？」

タ「自作の転送システムで家と繋げるんです」

ウ「それも自作？すごいね君は」

コ「ほんとにすごいって事ね」

タ「もしもし？」

メ「タクヤ様、どうされました？」

タ「早速手持ちの入れ替えだ。俺はそっちにカイリキーとマルマインを送る。そっちはバクフーンを送ってくれ」
メ「わかりました」

手持ちの入れ替えが終わった。

タ「よし改めて、ヒノアラシゲットだ！」

ハ「ハッサム！」

タ「よし、出てこいバクフーン！」

バ「バクッ！」

カ「うわー、バクフーンだ！」

タ「バクフーン、ヒノアラシの世話を頼む。ハッサムも協力してくれ」

バ「バク！」

ハ「ハッサム！」

バクフーンは背中にヒノアラシを乗せた。

カ「こう見ると親子みたいですね」

バ「バクバク！」

ヒ「ヒノー」

タ「もう仲良くなったみたいだな。じゃあ行くぞ、コトネ、カズナ
リ」

コ「うん！」

カ「はい！」

ハ「ハツサム！」

ウ「じゃあ気を付けてねー」

俺たちは研究所を後にした。

To Be Continued . . .

Episode 4 自己紹介 新人トレーナーコトネ&カスナリ

どうも、タクヤです。29番道路にきています。

タ「とりあえず改めて自己紹介しようか。まず俺から」

俺は一息置いて自己紹介を始める。

タ「俺はタクヤ。年は16だ。トレーナー歴6年で今年が7年目だ。俺はもともと研究職のほう希望だったからジムは回っていないが、実力を試したいから今年からジムを回る。敬語とか、そういうのはいいからな」

カ「よろしくお願いします」

コ「よろしくって事ね」

タ「で、手持ちのポケモンは、ここにバクフーンとハッサム、さっき貰ったヒノアラシだろ。であと三体はこいつらだ！」

俺は3つのボールを投げた。するとポケモンが出てくる。

タ「テツカニンとゲンガー、ガブリアスだ」

コ「すごい！テツカニンの色違い!？」

カ「ガブリアスも強そうですね！」

テ「テツカ!！」

ゲ「ガー!！」

ガ「ガアブツ!！」

次はコトネの番か……

コ「私はコトネ。こっちはマリル。で、さっき貰ったチコリータ。

よろしくって事ね」

マ「リルル〜」

ハ「ハツサム！」

チ「チコー！」

カ「僕はカズナリです。こっちがさっき貰ったワニノコ」

ワ「ワニワニ！」

タ（そーいや、俺が願えばポケモンの個体値が6Vになるように神に能力もらったんだっけ）

俺はチコリータ、マリル、ワニノコ、ヒノアラシを6Vにすべく願う。

タ（チコリータ、マリル、ワニノコ、ヒノアラシの個体値を6Vにしる！）

そう願った。すると、頭に念話が届いた。

神「早速6Vの願いか……」

タ「神様！？」

神「願い、届いたぞ。今よりチコリータ、マリル、ワニノコ、ヒノアラシの個体値は6Vだ」

タ「サンキュー神様」

この念話の時間僅か0.01秒。

タ「まあよろしくな、コトネ、カズナリ」

コ「うん」

カ「はい」

タ「そーうだ、さっきもらったポケモンでバトルしようぜ」
コ「いいね、それ」

カ「はい」

タ「まず俺はコトネとする。カズナリ、審判頼む」
カ「わかりました」

俺はヒノアラシを呼び寄せ、肩に乗つけた。

カ「これより、カントー地方タママシティのタクヤ対ワカバタウ
ンのコトネのバトルを始めます。お互い使用ポケモンは一体です」
タ「行くぜえヒノアラシ！」
ヒ「ヒノローロー！！！！！！」

「背中の炎が燃え上がった。

タ「まずは使える技の確認っと……」

ヒノアラシ 火鼠ポケモン。憶病で、いつも体を丸めている。襲わ
れると、背中の炎を燃え上がらせて身を守る。

使える技は 体当たり、煙幕、睨みつける、火の粉、火炎車、丸く
なる、スピードスター、火炎放射、転がる

やはり使える技の全てを覚えていた。しかし音量を小さくしてい
るので、二人は気づいていない。

コ「行くわよチコリータ！」
チ「チッコー！！」

チコリータとヒノアラシはにらみ合う。確かこいつは光の壁が使
えたな……。ソーラービームにも注意しないと。

タ「先行はそっちでいいぜ」

カ「先行はコトネから。では、始め！」

コ「先手必勝！チコリータ、葉っぱカッター！」

タ「ヒノアラシ、ジャンプだ！」

チ「チイー、ツコー！！！」

ヒ「ヒノーーーーー！！！」

チコリータは葉っぱを飛ばすが、ヒノアラシは飛び上がった。

タ「ヒノアラシ、回転しながら煙幕撒布！」

ヒ「ヒノオーーーーー！！！」

コ「チコリータ、気を付けて！」

チ「チー！」

タ「残念、ヒノアラシは前にはいない！ヒノアラシ、地面から顔を出して火の粉！！！！！」

ヒ「ヒノーーーー！！！！！」

コ「す、すごい。穴から顔を出して攻撃なんて……………！」

タ（貰ったばかりなのにスピードもパワーも段違い。おまけに技は全部使える。どういうことだ……………???)

考えていると、またもや念和が来た。

神「どうだ？お前のポケモンのパワーは」

タ「どういうことだ？」

神「お前が手に入れた時点ではそう強くないが、6vにしたときにお前のポケモン限定で、全能力の努力値を252にするのと、技をすべて覚えさせることをした」

タ「だからか……………」

この間僅か0.01秒。

タ「さあ、これで終わりだ。丸くなるの後に転がる！」

ヒ「ヒノオーラー！」

チ「チコー。チコオ……」

コ「ああ、チコリータ！」

カ「チコリータ、戦闘不能。よって勝者、タمامシシティのタクヤ
！」

タ「よくやったぞヒノアラシ。バクフーン、お前も褒めてやれ」

バ「バクバク！」

ヒ「ヒノオノノ」

コ「さすが先輩トレーナーって事ね。大丈夫、チコリータ？」

チ「チコオ……」

タ「なあ、コトネ、カズナリ」

コ「何？」

カ「なんでしよう？」

タ「戦った相手のポケモンによって、能力の伸びが変わることって、
知ってるか？」

コ「エツ？」

カ「本当ですか？」

とりあえず、こいつらに努力値の理論を教えるでしょう。

タ「これは本当だ。例えば、攻撃を伸ばしたかったらオタチやワン
リキーなんかを倒すといい。スピードならビリリダマやポツポなん
かだ。特殊攻撃ならケーシヤゴース。防御ならイシツブテやグラ
イガーだ。特殊防御ならメノクラゲやバリアードだ。また、性格に
よっても伸びやすい能力、伸びにくい能力がある。陽気なら、特殊
攻撃は伸びにくいし、素早さが伸びやすいという具合だ。これは俺
が研究した」

もちろん嘘だ。ただの現実世界の廃人知識だ。

タ「見た感じワニノコは生意気で、チコリータは真面目、マリルは
やんちゃって感じだろ？生意気な性格は特殊防御が伸びやすく、素
早さが伸びにくい。真面目は平均的に伸びる。やんちゃは攻撃が伸
びやすく特殊防御が伸びにくいんだ」

ヒノアラシはさしずめ無邪気つてところだろう。この世界では物
理技も使うからちょうど良く二刀流にすることにした。

タ「だから、これを踏まえて修行すれば、絶対に強くなれる」

コ「ありがとう」

カ「勉強になりました」

タ「とにかく、傷ついたチコリータはボールに戻して、ヨシノシテ
イのポケモンセンターを指そうぜ」

コ「うん」

カ「はい」

また俺はヒノアラシをバクフーンの背中にのせ、ハッサム、バク
フーンと共に歩きだした。目指すはヨシノシティ！

To Be Continued . . .

Setup 1 タクヤ

〔名前〕

タクヤ

〔姿、服装〕

髪型のイメージは生徒会の一存の杉崎鍵

顔は基本的に糸目だが、ここぞというときには目を見開く

細身の黒いフレームのメガネをかけている

身長は178cmくらい

服装はグレーのズボンに空色のYシャツで、上にコートまたはグレーのパーカーを着ている

また、偶にだがスーツを着ることがある

〔人物〕

基本的に仲間や友人、他人には優しいが、自分の気に入らない行動をする人や、敵には容赦をしない

沸点は低く、怒ると物凄く怖い

ポケモン廃人

〔ポケモン〕

転生時の手持ちは色違いのテツカニン、ガブリアス、ゲンガー、

ハッサム、カイリキー、マルマイン

自宅にはたくさんのポケモンがいる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2786z/>

ポケットモンスター ジョウトに転生!?

2011年12月11日17時50分発行